

その救助、法律的に無効

OWCC 中川和道 20191212

またまた救助の体験を書く。1981年だかの3月のことだ。八ヶ岳ジョウゴ沢で男性を救助して救助隊長をしたのだが、法律的に無効ですと言われてしまった。皆さんの参考になれば幸いだ。

よく晴れていた。赤岳鉱泉山荘がまだ古い建物だったころ、小同心を登ろうと星稜登高会のT橋一光さんと朝、鉱泉に立ち寄り、鳥のモモ焼を食べ馬力をつけて心を奮い立たせていた。その時だ。男が青い顔で走り込んで来て小屋のご主人に必死の形相で何か訴えている。あかん、事故だ。ご主人が舐めるような視線で登山客を眺める。救助隊を探しているのだ。中川とT橋は壁を向き「私は他人」を決め込んだが、やっぱり、だめだった。大きな声で「そこのお2人!」、あーあ。

2人は運命に翻弄されつつジョウゴ沢を登った。聞けば、早朝から単独で1名が30m大滝にとりついたが、シブのため抜け口でアイスバイルがはずれて転落、滝底で足首を骨折。動けなくなり次の人を待っていたら2人目も単独登攀者。救助を依頼された彼が山荘にやってきて救助を依頼。プロガイドのS野さん一行がスノーボートを担ぎ上げたものの「できる人間をあと2人以上連れて来い」となったらしい。中川たちが到着したときスノーボートは大滝の下の20mの垂直氷瀑の上で待っていた。S野さんに総指令をお願いして中川は大きな流木にロックハーケンを打ち、ファモウという愛用の確保器でボートを垂直に吊るしT橋とあと1人が下から逆V字に振れ止めを施しつつゆっくり氷瀑を下ろした。次に5m、15mなどの滝を順調に下ろし、やっと一般登山道に出た。

おや、硫黄岳の登山道からスノーボートを囲んで大勢の人々が下りてくる。見れば、東京都西部連盟で名を馳せている(今は労山カレンダーの大写真家だ)O氏がリーダーではないか。「何だよ、中川さんも救助訓練かい?」「え、冗談じゃないっすよ。こっちは本物ですよ」「じゃ、とりあえずうちのけが人の役には歩いてもらって、中川組に合流するよ」「すみません」、という訳で赤岳鉱泉着。ここでS野さんから重大なご発言が。「あなた方の救助はなかなか良い。ここから登山口までおろすさいの注意事項を言ってみなさい」「はあ、丸木橋からスノーボートが落ちこまないように中央部を掘り下げる先遣隊を送ります。あと、小便をしてもらってからスノーボートにしぼりつけます」とか何とか、なんでこんなこと口頭試問されるねん?と思いつつ答えた。するとS野さんは「私は客2人を連れて小同心正面クラックを登りに来たのだがこの時間からなら可能だ。ここから登山口までの救助隊、あなたに指揮を譲りたい。引き受けてくれませんか?」「はあ、お客はいくら払ったんですか?」「そっと言うけど、小屋代交通費別でひとり6万円だ。だから何とか登らせてやりたい」「了解です。S野さんご尊敬申し上げます。やらさせていただきます」。

S野さんが去ったあと、中川とOさんはどっと不安に襲われた。何しろアマチュアだ。どこにぬかりがあるか分からない。中川は、丸イスに腰かけてバケツに小便をしてもらっている男性に「アマチュアのみなさんに救助を依頼する以上、何があってもいっさいの責任は問いません」という念書を書いていただいた。あとで聞けば、これが無効だった。

西部連盟と星稜登高会の合同救助隊は、とにかく彼を無事登山口に下ろすことに成功した。警察の方が車で上がって来ておられ、「痛み止めは、何を、何時に、何錠飲ませたか」とまず聞く。さすがなものだ。ポンタールを結構飲ませたのでその旨書いてお渡しした。駆け出しクライマーだった中川に丁重なお礼を述べて下さったので感激した。

その後、東京に帰ったら、事故の方からていねいなお礼状と、何と10万円近いお礼金が届いた。びっくりした中川はその日のうちに「明日は我が身かも知れない。こんな大金を皆さん全員ににお払いしたのでは、山をおやめになるかもしれないと心配。お金は返すから、山はやめないで下さい。山で、また、お会いしましょう」と送り返した。周囲からは「青いなあ」と揶揄された。

「いっさいの責任問いません」は無効だとお聞きしたのは、2012年10月の溝手康史さん講演会「登山と法律」の場であった。座談会で安藤誠一郎さんにも切々と言われた。アマチュアゆえの怖さから過剰防衛をしてしまった。前も後ろも右も左も見ない、体当たりの、すごい体験だった。